『禽譜』

平成15年1月31日に、本館所蔵の貴重書9点が宮城県指定有形文化財（書籍）に指定されました。これらは、もと仙台藩主伊達家や大槻文彦氏の旧蔵書だったものを、本館が購入及び寄贈された資料で、伊達文庫・大槻文庫としてこれまで大切に保管してきました。

今回の特集では、宮城県指定有形文化財に指定されたこれらの貴重書について紹介します。

特集「きらめく文化財の世界」……パート❶

『禽譜』

❶『禽譜』『観文禽譜』

堀田正敦（1755～1832）編の『禽譜』は彩色の図譜で、個々の鳥を一種類ずつ一枚の紙に描き、鳥の名称及び原図の所蔵者などの情報が図の片隅に記されています。図と並んで簡単な解説も記され、単独でも図鑑として機能するように作られています。一方、『観文禽譜』は、詳細に記述された鳥類の解説書です。そこには中国や日本、地方による呼び方の違いや、鳥の外見上の特徴、生息環境のほか、見聞した情報、その情報や図に対する編者のコメントなどがまとめられ、さらに故事や和歌、本草学上の薬効などが詳述されています。

編者堀田正敦は、仙台藩6代藩主宗村の8男で、近江堅田（滋賀県大津市）藩主や下野佐野（栃木県佐野市）藩主を務めました。また、幕府の若年寄として42年間在職し、松平定信を助けて寛政の改革を進めた有能な行政官であるとともに、大名たちの文化サロンの中心メンバーとしても知られた人物です。

『魚蟲譜』

❷『魚蟲譜』

『魚蟲譜』は、彩色の図譜であり、図に解説や名前の由来などの詳細な説明がつけられています。江戸時代の図譜としては収載魚種が豊富なこと、写生の正確さや色の鮮やかさは目をみはるほどで、博物図鑑として貴重であるばかりでなく、美術書としても高い評価を受けています。本書には、魚のほかに蛇や亀、ヤモリやトカゲなども収載されていますが、昆虫は含まれていません。また、河童や龍などの想像上の生物の図も含まれており、本書の一つの特色となっています。

なお、『魚蟲譜』は、江戸時代を代表する本草学者であり、江戸幕府最高位の医師である法印の称を与えられた栗本丹洲（1756～1834）の著作から多数転写したとみられます。丹洲の活動の陰には、自らも優れた博物学者であった堀田正敦の厚い信任と後援があったとされています。

『關算前傳』

❸『關算四傳書』

仙台藩の天文学者戸板保佑編の『關算四傳書』は、「關算前傳」、「關算後傳」、「關算要傳」「關算完傳」の4種全511巻からなり、方程式論・行列式論などを創始した関孝和（1640～1708）以降に著述されたすべての関流算書を集大成したものです。保佑は単に集大成しただけではなく、自ら校訂し、評論も加えており、我が国和算史上屈指の資料とされています。

戸板保佑は仙台藩士で、中西流算術を青木長由に、天文暦術を遠藤盛俊に学びました。宝暦3年（1753）、保佑45歳のとき京に上り、土御門家陰陽頭安倍泰邦を助け宝暦改暦に加わりました。先に、加わっていた関流の数学者山路主住に師事し、『關算四傳書』の編纂を始めましたが、完成したのは安永9年（1780）、保佑72歳の時だったといわれています。本館には伊達文庫として474冊所蔵されています。

『貞観政要』

❹『貞観政要』

『貞観政要』は「貞観の治」として名高い唐の太宗の四半世紀にわたる治世（627～649）について、中宗・玄宗時代の歴史家呉兢が、太宗と群臣との治世にかかわる問答を詳述したものです。中国では理想的な政治の実践記録として歴代の帝王に尊崇され、刊行されてきました。我が国においても、帝王学の聖典として為政者や教養人の愛読書でした。殊に徳川家康は、『貞観政要』を愛好し、慶長5年（1600）2月に、足利学校の前校長、閑室元佶に木活字数10万字を与えて出版させています。京都伏見の円光寺において刊行されたことから、伏見版『貞観政要』といわれるものです。本館所蔵の『貞観政要』は、伊達家旧蔵の伏見版であり、江戸幕府に始まる本格的な官版刊行の先駆けとなるものです。

❺『光悦謡本一百番』

光悦謡本は、慶長期(1596～1614)に観世流の能や謡の人気曲100番を選び、それを木活字で印刷して1曲1冊に仕立て、100冊を一揃いとしたものです。本館所蔵の『光悦謡本一百番』は、寛永の三筆の一人といわれた本阿弥光悦（1558～1637）及びその門弟による美しい書体の木活字を用いて印刷されています。また、料紙は全面に胡粉が具引きされ、その上に雲母模様が刷り込まれたものを使い、装丁にも工夫を凝らした特製本です。版組・料紙・装丁などの違いによって17種類に分けられる光悦謡本のなかでも、特製本は最も豪華で珍重されたものです。本書は伊達家の旧蔵書で、「源氏供養」1冊を欠くものの99冊が揃っています。

『光悦謡本一百番』のうち「道成寺」

❻『生計纂要』

仙台藩の蘭学者大槻玄沢（1757～1827）は、幕府の命によりフランス人牧師ノエル・ショメールの日用百科事典の蘭訳版を翻訳しました。その際、日用百科事典の訳書『厚生新編』の草稿を『生計纂要』と名づけ、仙台藩の藩庫に納入したのです。この『生計纂要』は伊達家に秘蔵され、仙台藩の殖産興業に役立てられました。

最先端の医学や産業技術についての知識が記述された『厚生新編』は、幕命によって流布が禁じられ、昭和12年（1937）に静岡県立図書館の葵文庫本により公刊されるまで、世に出ることはなかったとされています。

『生計纂要』

❼『三航蝦夷日誌』

北方探検家松浦武四郎（1818～1888）は、蝦夷地、樺太、国後、択捉を単身で探検し、その記録を詳細な日誌としてまとめました。

『蝦夷日誌』、『再航蝦夷日誌』、『三航蝦夷日誌』の3編に分かれた全35冊の本書は、総称して『三航蝦夷日誌』とも呼ばれ、それぞれの地域についての精密な地誌ともなっています。武四郎は、嘉永3年（1850）正月に本書の稿を起こし、12月に脱稿したとされています。また、武四郎はその原稿を浄書し、水戸藩主徳川齊昭、幕府、仙台藩主、函館奉行に献上したと伝えられています。本館所蔵本は、全冊の巻末に「多気志郎納本之印」の印記が押され、版心に「不貸不鬻　多気志楼蔵」とある原稿用紙を用いて書写されていることから、武四郎が仙台藩主に献上したものと考えられています。

『蝦夷日誌』

❽『北海道風土記』

『北海道風土記』は、明治2年（1869）に大槻文彦(1847～1928)によって書かれた北海道と北方領土に関する地誌です。文彦最初の著作で、出版はされませんでしたが、明治7年（1874）に樺太経営についての建議書とともに左院に1部献上されました。祖父磐水、父磐溪の集めた豊富な蝦夷地関係書籍を引用しつつ、地理、歴史、政治、風俗、産物、地図などの構成で書かれています。『琉球新誌』、『小笠原島新誌』は、共に出版されたものですが、いずれにも文彦の手になる書き入れが随所にみられます。上記三作に明治11年（1878）の『竹島松島の記事』を加えた大槻文彦の地誌四部作は、明治初期に書かれ、近代日本の国家意識が形成されていくなかで、国境の明確化を意図した重要な著作とされています。

『北海道風土記』

❾『言海』

大槻文彦の『言海』は、日本の辞書史上に不朽の足跡を残した名著の誉れ高いものです。本館が所蔵する『言海』は文彦自身による自筆稿本で、文彦が辞書編纂の基本要素とした、語の採集、仮名遣いの決定、品詞の判別、語源の探求、典拠の確定などに最後まで精魂を傾け、推敲を重ねた様子をつぶさに示す貴重な資料です。また、巻首「編纂の大意」に述べられた編集の基本方針は、近代国語辞書の編集方法を確立したものとされ、巻頭に置かれた「語法指南」は文法の解説で、現代日本語文法の原型となっています。

『言海』の編纂は国家事業として始まったものです。命を受けた文彦は10年の歳月を費やし、明治19年(1886)3月23日、『言海』の原稿を文部省に提出しますが、出版されず留め置かれました。明治21年（1888）10月、自費で出版することを条件に原稿が文彦に下賜されました。文彦は原稿にさらに手を入れ、翌年に第1冊を刊行、明治24年（1891）に全4冊の刊行が終わったのでした。

『言海』

宮城県図書館には、今回紹介した資料のほかにも、歴史的・美術的に価値のある貴重な資料を多く所蔵しています。次号では、絵図や地図資料を紹介します。